児童文学批評というたおやかな流れの中で ⑥

―いま児童文学は「げんき」になるよりももっと弱虫で臆病で卑怯者でときに嘘つきになった方がいい―

細谷 建治

＊げんきかるた

木地雅映子『氷の海のガレオン／オルタ』（ジャイブ　ピュアフル文庫　06年11月、09年11月より、発売・発行元をポプラ社へ移管し、ポプラ文庫ピュアフルとして再スタート）の「オルタ追補、あるいは長めのあとがき」の中に、次のような一文がある。

朝礼のときね、先生がね、おはようございますっていう声が小さーいって言ってね、やり直しをさせるんだよ！「もっと元気に―！」とか、そういうことを、怒って言うの。「元気にしろ」って怒るなんて、ヘンだね？

オルタは、学校に行きはじめてから毎日のように様々な「？」を抱えて帰ってくる。そのいくつもの「？」の中に、〈「元気にしろ」って怒るなんて、ヘンだね？〉というのがあった。

ぼくは、このくだりを読んだとき、ちょっと、子どもの本・九条の会編『げんきかるた』（ポプラ社　09年7月）のことを思い浮かべていた。「へいわかるた」という企画で行われていた活動が、できあがったら「げんきかるた」に変わっていた。読み札のことばを書く方に参加していたぼくのところに、「げんきかるた」という名のかるたが届いたときのショックというか落胆は、相当に大きいものがあった。

ぼくにとって、「げんき」は、「平和」よりも「戦争」により近いものだった。それなのに、平和を希求し戦争への道に反対する活動のかるたが平気で「へいわ→げんき」と名を変えている。それはまったくのところ「へいわかるた」から「せんそうかるた」への改変であった。

ぼくが「げんきかるた」について、落胆したのには二つの意味あいがあった。一つは、すでにいったように「げんき」が「平和」よりも「戦争」により近いことばであり、